

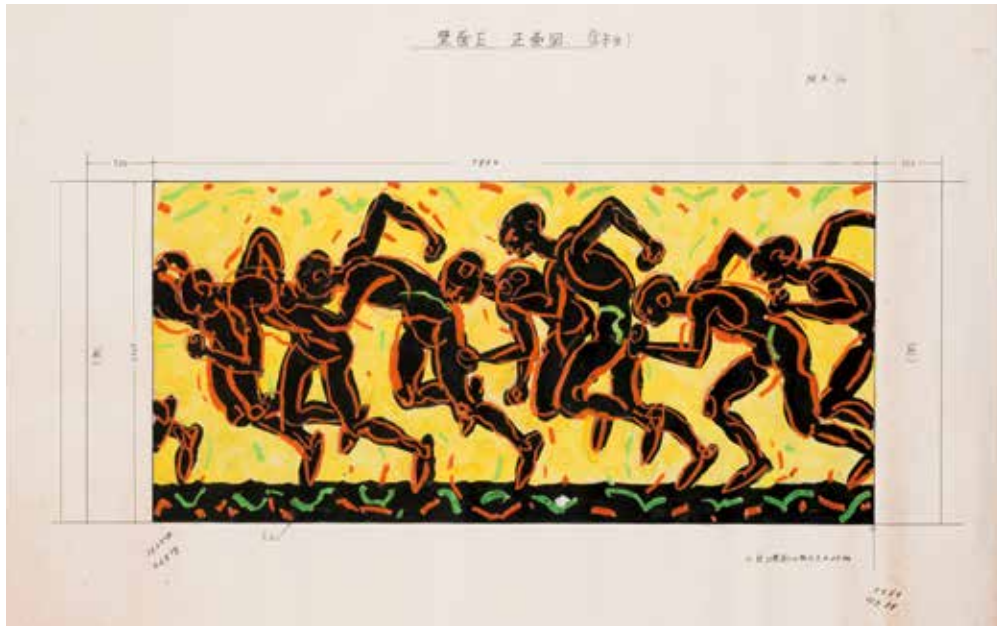
収蔵品から

国立競技場モザイク壁画原画《より速く》下絵

宮本三郎(1905-1974)

1964年頃 紙、オイルパステル、墨、水彩、鉛筆

ミュージアム コレクション！
 気になる、こんどの収蔵品
 ——作品がつれてきた物語
 2020年4月25日(土) - 6月14日(日)



2020年に東京で再びオリンピックが開催されることになり、国立競技場をはじめ、各種競技場や選手村の整備などが急ピッチで進められている。メインスタジアムとなる国立競技場は収容人数の問題などで建て直すことが決まり、一度は国際コンペでザハ・ハディッドの建築案に決まったものの、巨額の建設費を理由に白紙撤回されて迷走。再選により大成建設と隈研吾の案に決まった。

この建て替えには実はもうひとつ問題が持ち上がっていた。1964年の東京オリンピックを記念して、当時第一線で活躍していた画家たちが壁画の下絵を描き、スタジアムの大きな壁面がモザイクタイルで彩られていたのである。この壁画の行方が議論となった。

今回紹介する作品はその一枚で、宮本三郎(1905-1974)による「国立競技場モザイク壁画原画《より速く》下絵」である。

石川県小松市に生まれた宮本三郎は、1935年に世田谷区奥沢にアトリエに構え、巧みな描写力と絢爛な色彩で人物や風景を描いた洋画家である。2004年に住まいと作品(愛用品や資料を含む)を世田谷区に寄贈し、現在は世田谷美術館分館の宮本三郎記念美術館として運営されている。このとき約10,000冊の旧蔵書や書簡などの関連資料も受贈した。数年前に宮本が描いたカレンダー(ピオフェルミン製薬)や展覧会ポスターなど、筒状に巻かれた資料を整理していたときに、1964年の東京オリンピックのポスターが見つかった。有名な亀倉雄策による公

式ポスター(第1号)だけでなく、競技写真をモチーフとした3種のポスター(第2・3・4号)もすべて一緒に包まれており、その中からこの壁画のスケッチも発見された。

宮本は《より速く》の他に球技を描いた《より高く》を制作しているが、その原画は見つかっていない。これらの壁画はそれぞれ3.7×8.3m、8.3×7.85mと大きく、1959年に郷里の小松市公会堂のために制作した黒御影石の壁画《小松の産業》(2.9×5.2m)に並ぶ大作である。宮本は制作にあたって次のような言葉を残している。

「昔からの、公共の建物を飾る壁画や彫刻は、大体にその建物の使用目的に添った主題で制作されて来ている。ここではやはりスポーツを主題としましたが、ただ小さな原図から拡大して施工されるモザイクの仕事だから、あまり困難の伴う細部的な手法は避けるようにした。主にスポーツの持つ力感や速度感といったものを強調したいと考えました。」(小冊子『国立霞ヶ丘競技場の芸術作品』、発行年不詳より)

《より速く》をあらためて見てみると、細部を省略した力強い線描の人影と背景の鮮やかな色彩に、オリンピックの短距離走を描いた古代ギリシア時代の黒絵式の壺絵を想起させる。

さて、一時は解体廃棄の話

が進んだ壁画作品だが、保存運動が高まり、国立競技場記念作品等保存等検討委員会が発足し、美術作品としての壁画の重要性が確認された。2019年10月には、国立競技場記念作品等設置等アドバイザー会議の答申を受けて、壁画は丁寧に解体されて敷地内に保管、完成後の再設置が決まった。長谷川路加(1897-1967)の《野見宿禰像》と《勝利の女神像》はスポーツのシンボルでもあることから一階入り口の正面に再設置。宮本三郎の2作品をはじめ、大沢昌助(1903-1997)の《動態》《人と太陽》、寺田竹雄(1908-1993)の《よろこび》《勝利》《躍進》《友愛》、脇田和(1908-2005)の《勝利の場》《飛天》《躍動》の全11作品はグラウンドのある地下二階の1964年のオリンピックを記念するコーナーにまとめられる予定。(学芸部/矢野進)



(左)《より高く》(右)《より速く》
 1964年 モザイク壁画 設置場所: 国立競技場・青山門側(東京都新宿区)
 制作: 小林綾子(モザイク研究所) 原画: 宮本三郎
 『宮本三郎の仕事』図録(世田谷美術館、2014年)より